

0歳児の母親を対象とした芝居によるお薬教室

○三宅 祐加¹, 岸本 桂子¹, 古田 裕明¹, 柴崎 正寛¹, 川合 由起¹, 鈴木 伶織¹, 坂口 眞弓², 石川 さと子¹, 森 久和¹, 福島 紀子¹(¹慶應大院薬, ²浅草薬剤師会)

[目的]成人と異なり乳幼児の薬の服用等には特別な配慮が必要である。そこで、正しい知識の普及啓発を目的とし、芝居を取り入れた方法を用いて、母親を対象に乳幼児に対する正しい服薬に関するお話し会を行った。

[方法]2009/9/17及び11/11に台東区立日本堤子ども家庭支援センター「くすりのおはなし会」(1時間)にて、1歳未満の子を持つ親(合計23名)を対象に、薬学部大学院生3~5名が乳幼児の薬に関する説明を行った。母親、父親、薬剤師が登場する芝居を主体とし、クイズや実演といった動的な要素を盛り込み、誰でもが理解できるよう視覚的な手法を用いた。①粉薬の飲ませ方、②服薬補助剤等の使い方、③シロップ剤の飲ませ方、④坐剤の使い方、⑤軟膏等の外用薬の使い方、⑤点耳薬の使い方、⑤お薬手帳の役割、⑥かかりつけ薬局の意義について説明を行った。また説明後に質疑応答、会の最後にアンケートを実施した。

[結果]各内容について事前に知っていた人数の割合は、「薬をミルクやごはんに混ぜない方が良い」43%、「粉薬を溶かすと苦みが増す薬がある」35%、「オブラートを水にくぐらせると飲みやすくなる」9%、「坐剤を半分使用する際には斜めに切った方が良い」22%、「点耳薬を冷たいまま使うとめまいを起こすことがある」13%であった。また、話の分かりやすさの質問に対し、全員が「とても分かりやすかった」、母親学級等で薬の話を聞いたことがあるかに対し全員が「ない」と回答した。

[考察]芝居という視覚的な手法を用いたことで、十分な理解を得ることができた。実際に処方される前に母親が事前知識を持って確実に理解することで、服薬指導を受ける際に疑問点を明確化して薬剤師に具体的に質問できると予測される。その結果、乳幼児のより適切な服薬が可能になると考える。